



獵師りょうしが原わら  
(榮谷まかえだに)

むかし榮谷に、とつても腕うでのええ獵師りょうしが、どこからきたのか、ある女と二人で、川のそばに小屋を建てて住みついたそうなの。

獵師は、ねろうた獲物えしものはかならず射止いしとめるといふ、大した腕前うでまえじゃった。

それに、射止めた獲物の一部を、いつも近くの人たちに分けていたので、榮谷の人たちは獵師のことを、心よう思うちよつた。

ある日のこと、ひどい嵐あらしになって、榮谷のあちこちの木は折おれ、川の水は音を立ててあふれるほど流れ出した。

夕方、嵐がようやくおさまり、獵師と女はほつとして、食事をとりはじめた。

そのとき、身も心もつかれきつたひとりの女が、たずねてきた。

「ごめんください」

獵師は小屋の外に出てみて、息いきが止まるほどおどろいた。そこに立っていたのは、まえにいつしよに暮くらしちよつた女房にようばうじゃった。

「おまえ、どうしてここへ……」

獵師がそういうと、女房は、うれしそうな顔かおをしていうた。

「おまえさんが、ずっと以前に獵うに出たままもどつてこず、まい日まい日まい日まい日まいに手てを合あせて、おまえさんが無事むじでいる

よう、おがんじよったところ、ある日、仏さまが夢枕にあらわれて、『戌亥（北西）の方角に行ってみよ』とのお告げがあったんで、その方角をさがしてきました」

女房はいつきにしゃべった。

「それにしても、おまえさんに会えてえかった、無事でえかった」

女房の目からは涙がどっとこぼれた。

そのとき、獵師といっしょに住んじよる女が、なにごとかと小屋から出てきた。

「この女はだれかね」

獵師はうろたえて、ただ、だまっちよるだけじゃった。

ふたりの關係を察した女房は、みるみるうちに顔の色が青うなって、いきなり獵師につかみかかり、ついには小屋の中にまで入り込んで、包丁やまな板を、手あたりしだい川に投げすてた。

「やめてくれ、やめてくれ」

獵師と女房とそれに女の三人が、川のほとりでもみ合ううちに、とうとう三人とも

川の中に落ちて、流されてしまった。

つぎの日、栄谷の人たちは、獵師たちの姿が見えんので、不思議に思うて、みんなでさがしたが、とうとう見つからな

んだ。

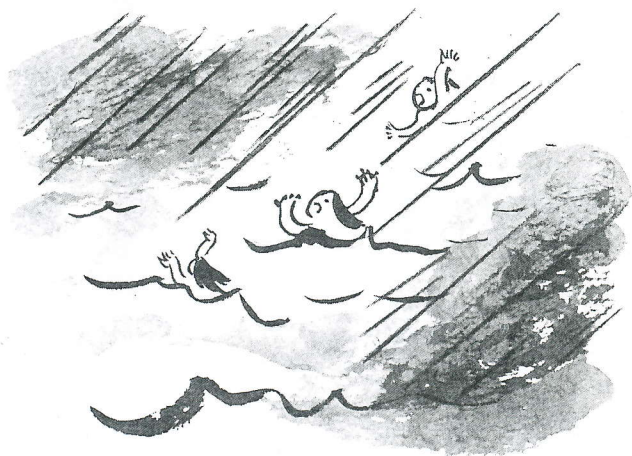
「かわいそうに、三人とも水に流され、死んでもうたにちがいなあ」

栄谷の人たちは、獵師たちがひどうあわれに思われて、三人が落ちたと思われ

る川のほとりに、ほこらをたてて、弔う

たそうな。

それから、獵師の家があったあたりを、「獵師が原」と呼ぶようになった。



○国道315号線ができたとき、栄谷の途中にある「狩人橋」のわきに、そのほこらは移しかえられた。